【短評】岡田 直著『相鉄沿線の近現代史』

相鉄は、関東大手私鉄中で最も遅く、そして最も劇的に改革を成し遂げた鉄道会社と言えるだろう。2019 年 11 月の JR 湘南新宿ライン乗り入れ、続いて 23 年 3 月の新横浜駅から東横線乗り入れは、鮮烈な驚きをもって迎えられた。神奈川県内陸部のきわめて地味な電車だったものが、イメージを一新するネイビーブルーの装いで東京都心へ進出、さらに西高島平、浦和美園や川越、森林公園まで足を延ばすようになったのである(路線延伸の事情は、本書第 8 章で詳述されている)。今一番注目を浴びているこの相鉄を、横浜都市発展記念館で数々の交通史関連企画展を手掛けてきた岡田　直氏が斬ってみせるのだから、面白くないはずがない。

岡田氏は昨年『横浜 鉄道と都市の 150 年』(有隣新書)を上梓、鉄道創業時からの 150 年を横浜に視座をおいて展開したが、『相鉄沿線の近現代史』では、本書あとがきに記されているように「大都市圏では市区町村ごとに区切りを入れてしまうと地理的なイメージがうまくできない」という思いから、沿線を一つのまとまりのある空間と捉え、のびのびと丁寧かつ実証的な筆致で、沿線の歴史やその背景にある文化的・地理的な事情を論じている。地図を中心とする豊富な図版と第一級の史料により、どのストーリーも説得力があり、読む者を引き込む。

相鉄は、もともとの本線が国に買収されて国鉄相模線になってしまったことに象徴されるように、歴史に翻弄されてきたというイメージがある。小田急や東急、京急は、開業当初から電化していたが、相鉄の電化は戦時中であり、いかに遅れていたかがわかる。しかし、本書を読むと、その苦難の歴史の中に今日の隆盛の萌芽があることがわかる。砂利輸送をはじめとする沿線の産業輸送をベースとした輸送体系から、軍事輸送の担い手となり、戦後は宅地開発に伴う通勤通学路線へと、創意工夫を凝らして時代の要請に応えていった鉄道の姿が、ここに活写されているのである。

(中川洋／法政大学文学部兼任講師)

岡田　直著『相鉄沿線の近現代史』はクロスカルチャー出版から２０２４年７月下旬に発売になり、好評発売中です。